

# 宮日新聞ポータルサイト「くろしお」より

社会医療法人 耕和会 常勤理事  
介護老人保健施設 サンヒルきよたけ施設長 柴田 紘一郎



宮崎日日新聞にはポータルサイトとして「くろしお」というコーナーがあり、時節により宮崎日日新聞の論説委員がその折々の話題をとりあげ、紙面に掲載しています。

小生は過去3回ほどその紙面で話題提供の栄誉を得ました。ここに紙面とともに再掲します。なんらかのエールになれば喜びです。

## 宮崎日日新聞 THE MIYANICHI

2019年(平成31年) 3月9日(土)

世界水泳選手  
池江 璃花子への応援  
かならず治る

**くろしお** シンガー・ソングライターさだまさしさんが歌う「風に立つライオン」のモデルで宮崎市清武町の老健施設長 柴田 紘一郎さんがずっとむかし、さださんに次のように語った▼「まさしさん、患者さんの命は助けるとは医者じゃなかよ。まさしさんなら分かるやろ。神様たい。患者が治ろうと努力し、治ろうという強い意志を持ち、そして気まぐれな神様が助けようと思ひ、医者が上手に神様の手助けをした時に危ない手術が成功するんだ」▼医師である柴田さんの専門は胸部外科だ。手術のミスが即、生死に直結する領域でメスを使い、たくさん命を救ってきた人の重い言葉。その柴田さんにして「どんな名医でも治せない患者がある」という(さだまさし著「嘯歌集」)▼競泳女子のエースで白血病を公表した池江璃花子さんが自身のツイッターで「思ってたより、数十倍、数百倍、数千倍しんどいです」と病気に立ち向かう心境をつづった。3日間以上も食事ができていないと明かした上で「でも負けたくない」との思いも示した▼腕のいい外科医はしばしば神の手を持つなどと形容される。間違いなくそんなクラスの一人で九州屈指の外科執刀医といわれた柴田さんをもってしても絶対に救うことができない患者とは。それは「治ろう」という意志を持たない患者▼風に立つライオンのような意志を持つ池江さんが負けるはずがない。白血病に限らず重い病気でつらい治療中のすべての人たちの希望の星。きついことを覚悟の上の数十倍とは想像を絶するが絶対に治ると信じている。日本中の人たちも。

## 宮崎日日新聞 THE MIYANICHI

2015年(平成27年) 5月27日(水)

人として  
生きてきたことの  
使命とは?

**くろしお** 西アフリカで猛威を振るったエボラ出血熱だが、最も死者の多かったリベリアで終息宣言が出た。ギニアとシエラレオネでも下火だが、爆発的な感染力があり、気は抜けない▼死者1万1千人を超す大惨事となった。悲劇性を増すが、医療従事者800人以上が感染し、そのうち400人以上が死亡した。感染拡大の抑え込みに成功した要因は彼らの尽力が大きい。危険地域で献身的に医療に当たった強い意志と勇気に打たれる▼さだまさしさんの名曲「風に立つライオン」が同名のタイトルで映画化され県内でも上映中だ。曲のモデルは、宮崎市の医師柴田 紘一郎さん(サンヒルきよたけ施設長)。1971年から2年間ケニアで外科手術などの医療活動をした▼柴田さんは映画について「医者として奪ってはいけないものは命と希望。人として生まれてきた使命とは何か、人間とは何か考えてほしい」と話す。縁のない異国の地で過酷な環境に身を投じる医師たちの姿が、逆風に立ち向かうライオンの勇姿に重なってくる▼いずれもアフリカが舞台だが、本県の大部分を占める中山間地にも通じる課題が浮かぶ。高齢化や人口減が進む一方で、医療資源が乏しいのは、ほとんど同じ構図だからだ。逆境の中で、いかに住民の健康を守るかが切実な問題になる▼リベリアでは終息宣言後も、地域のコミュニティー崩壊の問題に直面している。新型インフルエンザが世界的大流行(パンデミック)すれば、本県でもライフランなど社会機能に支障が及ぶことが想定されており、学ぶべき教訓は多い。

## 宮崎日日新聞 THE MIYANICHI

2009年(平成21年) 3月26日(木)

宮崎県の  
地域医療貢献をめざして

**くろしお** 「僕たちの国は、残念だけれど何か大切な処で道を間違えたようですね」。アフリカの大地で診療に当たる青年医師のつぶやき。その感慨は医師の生涯を貫くモラルになる▼歌手さだまさしさんの歌「風に立つライオン」の一節。モデルは県立日南病院院長で、清武町・介護老人保健施設長の柴田 紘一郎さん(66)宮崎市だ。ケニアへの派遣医時代、現地の人との交流をさださんが曲にした。途上国の医師らに今でも歌い継がれる▼その柴田さんが、四月から宮崎大医学部に新設される「地域連携室」の特任教授に就任する。地域医療に携わる総合医養成に、柴田さんの貴重な経験と情熱が買われた。地域医療はいま崩壊寸前だ。ケニア派遣に比する武者震いだろう▼限界にきている地域医療が、延岡市では崖っぷちで踏みとどまった。県北の拠点ながら医師の大量退職で危機に陥っていた県立延岡病院で、四月から腎臓内科を含む医師六人の補充が決定。急性腎不全など腎臓関係の救急医療体制が「一枚一枚」でつながった形だ▼神経内科医は確保できなかったが、ここまで県や宮崎大の懸命の努力があったと聞く。敬意を表したい。ただそれ以上に、医師不足に怯える住民の危機感があつたことも大きい。地域医療が住民との「共同作業」である現実を教えた▼若き日の柴田さんがケニアで感じた「国の間違えた道」とは、豊かさこそ引き換えに失われた精神の健康だった。現在の柴田さんはそこに、置いてけぼりを食う地域医療を加えないだろうか。繁栄の中でやせ細っていく医療、軽視される命。

(新聞紙面からの転用については、宮崎日日新聞社様より了承頂いています。)